

ヴェーバーの宗教社会学（2）

勝 又 正 直

4. 「プロテスタンティズムの倫理と
資本主義の精神」（3）1536年（54歳）創世記講義（～1545年まで継続）
1546年（63歳）アイスレーベンで死去（2月18日）

マルチン・ルターの生涯（徳善2012参照）

- 1483年（0歳）アイスレーベンで誕生（11月10日）
 1501年（18歳）エルフルト大学教養学部に入學
 1505年（22歳）法学部に進む。落雷を受けたのをきにしてアウグスティヌス修道院入り
 1507年（24歳）司祭となる。神学研究を始め、講義も一部担当とする
 1507年（28歳）ヴィッテンベルクへ移る
 1512年（29歳）神学博士、ヴィッテンベルク大学聖書教授となる
 1513年（30歳）第1回詩篇講義。塔の体験（1514年？）
 1515年（32歳）ローマ書講義。[教皇レオ10世、ドイツでの贖宥状（しょくゆうじょう）販売を許可]
 1517年（34歳）95箇条の提題（10月31日）
 1518年（35歳）第2回詩篇講義、ハイデルベルク討論、アウグスブルクで異端審問を受ける
 1520年（37歳）『キリスト教界の改善について』『教界のバビロン捕囚について』『キシルト者の自由について』など、宗教改革的著作を相次いで出版。教皇庁、破門脅迫の大教勅を発する
 1521年（38歳）正式に破門される。ウオルムス喚問、帝国追放を宣告され、ワルトブルク城に保護
 1522年（39歳）ヴィッテンベルク町教会で連続説教。新約聖書のドイツ語訳を出版
 1523年（40歳）改革運動を開始
 1525年（41歳）農民戦争。カタリーナ・フォン・ボラと結婚。『奴隷的意志について』を出版
 1530年（47歳）アウグスブルク信仰告白を提出
 1531年（48歳）ガラテヤ書講義
 1534年（51歳）旧約聖書のドイツ語訳完成。『旧新約聖書』として出版

ルターがドイツ語を作った

ルターが聖書をドイツ語に翻訳した、ということ、すでに共通のドイツ語があって、それへ翻訳したように思える。しかし、実際には、大きくは低地ドイツ語と高地ドイツ語に分かれる、さまざまな方言がしゃべられていた（現在でもドイツの方言はかなりの違いがある）。文章語としては神聖ローマ帝国の公用語はラテン語であった。だからルターが高地ドイツ語で聖書を訳し、それが活字となって読まれることで、この高地ドイツ語がドイツの標準語となった。

ヴェーバーの論文との関連でいえば、ルターの生涯で大きなポイントは、ルターがもともとアウグスティヌス修道会の修道士だったという点である。

西洋キリスト教の歴史において、それまでのゲルマン人をキリスト教化する大きな推進力は、修道会と教会であった。

ローマの教会は当初はいくつかある大都市の有力な教会の一つにすぎなかったが、次第に力を強め、ローマ帝国の後継者としてゲルマンの王に皇帝の冠を授けるという役割を演ずることで（ビザンチン帝国のギリシャ正教をのぞく）いわゆるカトリックの世界において頂点に立った。このいわば、体制側とでも言うローマ教皇を頂点としたカトリック教会は、領民から10分の1税を徴収する、教会が属するピラミッド型の組織であった。

かたや、修道会運動は初期キリスト教の理念に従った清貧と信仰の集団として、民衆の尊敬を受けていた。（修道会は同時に学問と技術革新の場でもあった。ルターは修道会で学問をまなび聖書教授となったし、たとえばシャンパン・ワインというのは修道士が発明したものである）。教会の腐敗と墮落が蔓延するたびに、キリスト教内部からはいくつもの修道会運動が起こった。修道会は、禁欲的に労働と祈りを専らとする集団として現れた。しかし、それは時にはあまりに極端となると、ローマ教皇を頂点とするカトリックの教会組織を脅かしかねない

存在として現れた。カトリック教会は、極端でないものは、正統としてのお墨付きを与えて、自らの組織のなかに組み込んだが、極端なものは異端として弾圧した。

修道士たちの良き行いによる業績は「教会の宝」としてプールすることができるとした。このプールされた「教会の宝」としてローマ教皇の裁量でほかの人々に分け与えることができるとされた。教皇から宝を分け与えられた人は、罪の償いを免じられる。こうして教皇が教会の宝を与える証明書が「贖宥状」であった（徳善2012, p.64）。

しばしば「免罪符」と呼ばれるが、正しくは「贖宥状（しょくゆうじょう）」。「贖宥」とは、カトリック教会で、「信徒が果たすべき罪の償いを、教会が免除すること」である。つまり、「罪を免じる」のではなくて、罪を犯した人がその贖（あがな）い（つぐない）をしなくてもいい、という証明書である。なぜなら、そのつぐないは、修道士たちがしてくれていてそのつぐないが教会にたくさん蓄えられていて、つぐないができない信者はお金を教会に払うことで、そのつぐないを代行してもらえるからである。

もちろん、罪も盗みや殺人とか背信とかの大罪を犯した者は地獄に落ちるしかないが、償い可能な罪ならば、それは死後、「煉獄」という場所で神から与えられた苦しみに耐えるならば、最後に審判では天国に行くことができることとされた。

「煉獄」というのは、それまでの、天国と地獄の2つの死後の世界に、あらたにつけ加えられた死後の世界である。「浄罪界」と呼ばれたこともあった。カトリックの世界観では、死後の世界は、地獄、煉獄、天国の3つである。この世界観をもっとも完成された形で表現したのが、ダンテの『神曲』である。煉獄では人間は7つの大罪（傲慢・嫉妬・憤怒・怠惰・強欲・暴食・色欲）を業火を受けながら浄化する。

ルターは罪のつぐないをお金で他の人に代理になってもらうなどというのはとんでもないことだとした。

ではルターの思考はどのように生まれ展開されていったのか。

徳善（2012）によれば、ルターの宗教思想の始まりは、聖書講義をしている時の躓（つまづ）きに始まる。

ルターは大学で学生に講義をしている時に、聖書の『詩篇』第31編2節の「あなたの義によって私を解放してください」という一節にはたと行きづまった。

この詩句はダビデが神に訴えた歌とされている。普通に考えれば、「神が与えた律法を私たちはまもっているのだから、神さま、神さまに正義というものがあるなら、その正義にもとづいて私たちをこの困難から解放してください」という意味になるだろう。別に「わからない」

というほどのこともないように思える。

しかしルターは神の「義（正義）」というものをもっと厳格に考えた。それは神の「怒り」「裁き」であって、「救い」と結びつくものではない。「わからない」とルターは思う。だがそれでは、学生に教えられはしない。ルターはもがく。

ここでなぜルターは「わからない」と思ったのか。ふつうなら、「神が与えた律法（きまり）をちゃんと守っている、だから助けて下さい」、と読める部分が、ルターが「理解できない」と思ったのか。

それは、神の与えた律法を自分がきちんと守っているという自信が持てなかった。なぜ自信がもてないのか。自堕落だからか、いやそうではなくて、自分にとても厳しいからこそ、自分のいたらなさをつねに感じているからこそ、真剣に信仰しているからこそ、自分は律法をちゃんと守っている、というようなおごりと満足を得られない、自分は徹底的に罪深い存在なのだと自覚せざるをえなかったのだ。「自分はそこそこいい人間だ、ちゃんとしている」という薄っぺらなおごり（驕慢）は、絶対の神のまえに打ち砕かれる。

ではどう解釈すべきなのか。ルターは言語学的にこの部分を調べる。

「神の義」というのは文法的には「所有者の属格」という用法が使われている。たとえば「お父さんの贈り物」という表現の場合、「贈る」という行為をする主体は「お父さん」である。「お父さん」が「贈る」という行為をすると、それは「お父さん」の手をはなれ、贈られた人のものとなる。「所有の属格」というのはそういう用法である。だから、「神の義」というのも、神から人間へと「贈り物」として与えられる、「義」はそれを贈られた人間の所有するものとなって人間は救われる。ではその「贈り物」とは何か、それが神の子、イエス・キリストにほかならない（徳善2012, pp.37-40）。

こうして、ルターは、旧約聖書の「詩篇」のなかに、その後の「新約聖書」にかかれる救世主イエス・キリストの予告を、読み込んだのである。

これによって、旧約聖書と新約聖書の関係も生まれる。つまり旧約聖書は私たちに律法をあたえ、新約聖書はそれを守れない罪深き私たちを救う救世主イエスを与えるのである。

ルターはこの着想を塔の中で得たという（塔の体験）。ルターはこの着想をさらに押し広げ、「十字架の神学」を作り上げた。それは以下のような内容である（徳善2012, p.60）

1. 律法とそれにもとづく人間の行いによっては、人間は救われないこと。
2. 罪に堕ちた後の人間の自由意志とは名ばかりであっ

て、これによるかぎり、人間は罪をおかすほかないこと。

3. 神の恵みを得るには、人間は自己自身に徹底的に絶望するしかないこと。
4. 神の救いの啓示（宗教的真理の人間への知らせ）は、キリストの十字架によってのみ与えられること。

「キリストの十字架」とは、神の子イエスが私たち人間の罪を背負って犠牲となって十字架にかけられたこと、そのことによって罪深き私たちは救われるということ、で、キリスト教の根本的な教えである。この教えは、イエスが捕らえられ十字架にかけられるという「受難」(passion)の話として、キリスト教徒には繰り返し語られ、また絵画・彫刻・ステンドグラスなどで、字の読めない民衆にも分かるように教えこまれてきた。

(イエスの受難物語については

<http://www.jizai.org/wordpress/?p=405>、

十字架にいたる7日間については

<http://ebible.web.fc2.com/jujika01.htm> 参照)。

さてこうした神学を確立したルターにとって、聖書に書いてない煉獄という世界や金銭によって罪のあがないを免除されるとする贖宥状(しよくゆうじょう)というのは、許しがたい逸脱であった。そこで彼は学者としてこの問題を公開討論にしようと、質問状の形で、つまり95箇条の提題として提起したのである。

5. 「プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神」(4)

まえおきがたいへん長くなった。ここで『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』の内容をみていくことにしよう。

「プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神」

のあらすじ

第1章 問題の提示

第1節 信仰と社会階層

統計をみると、資本主義に参加することと、プロテスタント(新教徒)であることとの間にプラスの(正の)相関関係がある。

この関係に対して、一般的にはつぎのような説明が考えられる。(1)経済発展が改宗を引き起こした、(2)少数派は経済に専念する、(3)プロテスタントは世俗的だから、(4)営利活動の反動で宗教に向かった。

しかしこれらの説明に対しては、(1)むしろ宗教性が経済志向を決定しがち、(2)ドイツではカトリックの方が少

数派、(3)プロテスタントはむしろ非世俗的だった、(4)プロテスタントでは事業と信仰が仲良く同居していた、という反論が成立する。

そこでむしろ、一見水と油のようにみえる、資本主義参加とプロテスタントであることが、じつは「親和的關係」(相性のいい関係)にあり、プロテスタンティズム(新教)から資本主義への参加、がじつは説明できるのではないか、と考えられる。それをこれから考察していくことにする。

第1章第2節 資本主義の「精神」

まず「資本主義の精神」を体現している思想として、(初期アメリカの文筆家・外交官)ベンジャミン・フランクリン(1706-90)の思想を彼の自伝で見てみよう。

フランクリンは自伝でこう言っている。「時は金である。…信用は貨幣である。…貨幣は貨幣を生む…勤勉と質素を別にすれば、すべての仕事で時間の正確と公平を守ることほど、青年が世の中で成功するために必要なものはない。…正直な男であると人に見せよ」。

彼の自伝にみられる精神は、営利による資本の増大を自分の倫理的な義務とみなすような精神である。これに対して、ドイツの高利貸資本家だったヤーコブ・フッガー(1459-1525)引退も他人に儲けさせることもしないで「可能な限り儲けようと思う」と答えたという。フランクリンの精神は、フッガー(このフッガー家への借金を支払うために贖宥状販売がおこなわれた)のような単なる金銭欲とはちがう、ある種の倫理性をもっている。

フランクリンの自伝にみられた資本の増大を志向する、この「資本主義精神」は、これまで通りに生きていければ良いする「伝統主義」とは対立する。

ところで、ゾンバルトは経済の基調を、(1)「欲求充足Bedarfsdeckung」と(2)「営利Erwerb」とに分けている。

ふつう、欲求充足には伝統主義が、営利には資本主義の精神が対応するように思える。しかしことはそんなに単純ではない。営利活動が伝統主義によって営まれていることもある。

たとえば、19世紀半ばまでのヨーロッパ大陸の繊維工業前貸し問屋をみるならば、①生産過程は農家の裁量に委ねられ、②販売は仲介商人まかせで、③同業種間の反目も少なく、④営業時間も短くて生活のテンポはゆとりがあり、たまに羽目をはずした消費がなされるが、身分相応の生計の維持が目指されていた。

ところがそこに資本主義的精神をもつ青年実業家(ヴェーバーの叔父がモデル、『伝記』136頁)が登場して変革が起きた。経営組織の形態は同じだが、経営者は、①生産過程の掌握、②販売の掌握をする、③同業者間の競争が生まれる。結果④ゆとりは消え、真面目いっぽうの生活

となり、消費をおさえて営利のための資本の再投下がなされるようになる。

ところでこの精神は、よく問うてみると、人のために事業 *Geschaeft* があるのではなく、事業のために人がいる、という、じつはきわめて倒錯的で非合理的なことになっている。

けっして営利を追求する活動にあわせてそれに都合のよい精神が生まれてきた、とは思われない（それだったら、伝統主義のままだったはずである）。ではこの、営利活動を倫理的義務、すなわち「天職 *Beruf*」とみなすようなこの思想はどこから来たのだろうか。

第3節 ルターの天職概念

営利活動での資本増大を「天職」とみなすこの思想は、(聖書外典「ベンシラの知恵」で) 世俗の労働を「天職 *Beruf*」と訳したルターの宗教改革の精神に由来する。つまり彼は修道僧にしか通用しなかった「天職」の論理を世俗の仕事に適用した。

しかし世俗労働を「天職」とみなすだけでは、「資本主義の精神」がもつ、資本の増大をたえず求める、あの駆り立てられるような心のありかたは生まれない。絶え間ない資本の増大へひとびとを駆り立てた起動力 (*Antireb*) はどこにあったのかを知るために、我々はプロテスタンティズムの禁欲思想にわけいることにする。

第2章 禁欲的プロテスタンティズムの天職倫理

第1節 世俗内的禁欲の宗教的基盤

禁欲的プロテスタンティズムの、主な担い手は、(1)カルヴィニズム、(2)敬虔派、(3)メソジスト派、(4)再洗礼派系の教派、に分けられる。

とりわけ(1)カルヴィニズムの「予定説」、すなわち、人は救いと滅びのどちらかに予定されており、それは変更不可能であるという教えは、決定的な影響力をもった。

ピューリタン革命時のイギリスでまとめられた「ウェストミンスター信仰告白」にはこの教えが明記されていることから、この教えが一般信者にとっても周知の教えだったことは明らかである。

自信のない一般の信者が、救いに予定されていることの「証し」を求めるのは無理もなかった。ルッターは世俗の労働も神から与えられた「天職」とみなしてよいとした。だから修道院でおこなわれた合理的な禁欲主義で世俗の労働を行うことが可能になっていた。カルヴァン派の人々はこの合理的・禁欲的な世俗の労働で「神の栄光」を増大させることに「救いの証し」を見いだそうとした。

こうした傾向は(2)敬虔派、(3)メソジスト派でも同様であった。ただ両派では感情的側面が強く、その分だけ合

理的な禁欲が弱まっている。

(4)再洗礼派系の教派の教義はこれとはちがう。彼らは心正しき者だけから構成された「教会」を作り上げようとした。心正しさは精霊がその者に宿ることで証明される。だから精霊が宿るのを妨げるような、人間の本能的で非合理的なものを克服しようとした。その結果、合理的な禁欲主義をめざすことになったのである。

こうしていずれの宗派の信徒も、神に召命された者であることの証しをもとめて、合理的で禁欲的な世俗労働へと駆り立てられたのである。

第2節 禁欲と資本主義精神

プロテスタントでは牧師が信徒の相談にのり指導することを「司牧」(*Seelsorge*) という。

ここでは、この司牧の活動から生まれた神学書、とくにイギリスのピューリタンの指導者だったリチャード・バクスター *Richard Baxter* (1615-91) の書いたものを取りあげる。この司牧(魂のみとり)が宗教的な教えが日常生活へ影響する際の仲立ちの役割をしているからである。

プロテスタント、とくにカルヴァン派、の司牧(宗教的指導)では、「救いの証し」とされる「神の栄光」の増大は、有益な職業労働から生まれるとされた。そしてその職業の有益さは、結局、その職業がもたらす「収益性」(どれだけ儲かるか)で測ることができるとされるようになった。しかも楽しみ事は徹底的に否定された。その結果、儲けても、楽しみに使わず、さらに営利活動に投資してどんどん利潤を追求していくことが宗教的に奨励されたのである。しかもそうした経営者のもとには、仕事を「天職」とみなして必死になってはたらく勤勉な労働者さえも与えられた。

しかし富が増大するにつれて宗教心はうすれていく。その結果、フランクリンにみられた、倫理的ではあるが宗教色の消えた「資本主義の精神」、つまり営利による資本の増大を自分の倫理的な義務とみなす精神が生まれたのである。

こうしてつぎのことがあきらかにされた。すなわち、資本主義を構成する要素のひとつである、「天職」という考えのうえにたつ合理的な生活態度は、ルターの「天職 *Beruf*」という考えを前提にしてプロテスタント(新教徒)がみずからの「救いの証し」を合理的な禁欲で追求したことから、もたらされた。

しかし現代においては資本主義はすでに自律的な自動運動をしており、もはやそれを生み出した精神の支えを必要とはしていない。私たちは、生命のない機械と生きている機械(官僚制)の運動のただ中に、巻き込まれていくばかりである。

以上、ヴェーバーの「プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神」のあらすじをみた。ここでもう一度この作品の資本主義の成立という観点からこの論文の内容を見なおしてみよう。

この論文はしばしば西洋的合理化を述べた作品であるかのごとく語られてきた。しかし内容を要約すると、解明はおもに経済的な側面に向けられていることがわかる。

社会の主流である経済体制が、「欲求充足」の経済体制から「営利」中心の資本主義体制に移行する。その移行、あるいは転換はどのように起きたのか、それにたいする宗教の働きが問題とされている。

「欲求充足」の経済に適合的なのは「伝統主義」とよばれる、これまで通りの生活ができればいいとする精神である。それに対して、「営利」活動が中心となった資本主義は、もちろん伝統主義によって営まれることはあるにせよ、やはりそれに適合的なのは営利を自己目的とした「資本主義の精神」である。

なお、ここでの資本主義とは、商人が地域による商品交換率の違いを利用してもうける商業資本主義や、金融市場を利用して（相場の時間による差をりようして）利益をあげる金融資本主義でもなく、いわゆる（労働者には精算して物の価値よりも少なく払うという、生産現場と市場との価格差を利用して利益をあげる）「産業資本主義」を指している（岩井克人著『ベニスの商人の資本論』参照）。

「産業資本主義」とは、「資本主義 封建制度の次いで現れ、産業革命によって確立された経済体制。生産手段（生産過程において労働と結合して生産物を算出するために消費・使用される物的要素。労働対象（原材料・土地・樹木・功績など）と労働手段（道具・機会・建物・道路など）とからなる）を資本として私有する資本家が、自己の労働力以外に売るものをもたない労働者から労働力を商品として買い、それを上回る価値を持つ商品を生産して利潤を得る経済構造。生産活動は利潤追求を原動力とする市場メカニズムによって運営される」（『大辞泉』）。これは基本的にマルクスの定義する「資本主義」と同じである。

しかしこの「資本主義の精神」はそれ以前の「伝統主義」からは生まれたとは考えられない。伝統主義が「今生きてあること」（dasein）を大切にするのに、「資本主義の精神」は現在を犠牲にして果てしない彼方にあるものへ向かって駆けていく、そうした倒錯した精神だからである。

そうした精神の由来を、ヴェーバーは修道院の禁欲主義に求める。世俗を離れ、ただ神のみを想い、厳しい労働によって自分たちばかりか俗人たちの救済を作り上げていた修道士の活動の論理、この論理はどのように世俗

へともたらされたのか。

神からの呼びかけによって与えられた使命としての職業（Beruf）はそれまで、聖職のみに限定されていた。だから修道僧の禁欲もあくまでも世俗の外の修道院に限定されたままであった。

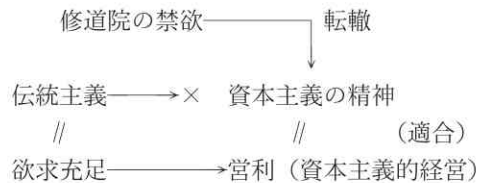
しかしルターが、世俗の一般の仕事も、神からの召命による「職業」であるとみなしたことで、この修道院だけにあった禁欲主義は世俗へともたらされた。ちょうどレールを切り替えることで電車が引き込まれてくるように、禁欲主義は世俗の労働の世界に引き込まれることになった。

その意味で、ルターはレールを切り替える人、つなぐ者「転轍手」（『宗教社会学論集』58頁）なのである。

しかし世俗の仕事が「職業＝使命」とみなされるだけでは、あの、追い立てられるような、強迫的な労働は生まれにくい。

それをもたらしたのは、カルヴァン派の宗教カウンセリング（「魂のみとり」）であった。彼らの「魂のみとり」（司牧）では、業績とか収益が「救いの証し」であるとみなされた。その結果、自分が救いに予定されているか不安な平信徒は、「救いの証し」をもとめて、いまや聖職と同格の「職業」と見なされるようになった世俗的労働にまい進することになったのである。

図にまとめると以下のようなになるだろう。



- ルターの転轍 : 仕事を「職業＝使命」とみなす
「意味連関」: 修道僧の禁欲的労働の論理が世俗労働をつかむ
カルヴァン派の「魂のみとり」: 収益を「救いの証し」とみなす
「感情連関」: 不安→証しの追求 心理的起動力が生まれる

ルターの転轍により、世俗労働＝「職業」とみなされたことにより、修道院の禁欲の論理が世俗の労働をつかむ。人々は日常の仕事を、神から与えられた、神の意にそった「使命」としてはげむ。つまりあたらしい意味の連なり（意味連関）が世俗の労働をとらえたのである。

カルヴァン派の魂のみとりは、収益・業績＝「救いの証し」とみなした。不安にあえぐ人たちは「証し」を求

めて仕事（職業）にまい進した。こうして禁欲的な労働の心理的な機動力がうまれた。収益をあげても救われるわけではない。しかし一般の信徒は収益をあげて心理的に安心したいと思った。つまりここでは目的—手段の連関があるのではなくて、不安から労働するという、心理的な連なり（感情連関）があるわけだ。

ここには二つの「解釈がえ」があった。

まずはじめに、ルターは日常的な労働が「転職」として解釈しなおした。その結果、聖職者の世界と俗人の世界の区分の廃絶され、聖職者（修道士）の論理が俗界への侵入してきた。しかしそれだけでは社会資本主義へ転換するには不十分だった。

つぎに、カルヴァン派では収益・業績が「救いの証し」と解釈された。その結果世俗的労働にまい進する心理的機動力が生まれた。そうして、伝統主義が支配していた経済は、資本主義が支配する経済システムへと移行したのである

つまり、伝統主義と結合していた伝統主義的経済（単純再生産）を、宗教的な合理的禁欲思想が捉える。その帰結として、伝統主義的経済システムから資本主義的経済システムへの移行がうまれたのである。

さて、ここでは新しい社会科学のアプローチが生まれている。つまり行為をする人間がその行為をどのような意味を付与しているのか、その意味付けをちゃんと解釈し理解することで、その行為はどのように社会を作り上げていく、あるいは社会を変革していくのかを説明しようとするアプローチである。（ヴェーバーはとりわけ後者の社会変革の方に関心があったように思われる）。

後年、ヴェーバーは『社会学の基礎概念』（1920b）でつぎのように書いている。「社会学とは、社会的行為を解釈しつつ理解し、そうすることによって社会的行為の経過や結果を因果的に説明しようとするひとつの学問である。」（WuG p.85）。これは、この「プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神」で彼がおこなったこの新たなアプローチをふまえていると思われる。

もちろんカルヴァン派の平信徒のふるまいように、理屈では説明できないけど、感情としては説明がつく場合もある。

そのことをふまえてヴェーバーは次のように書いている。

「行為の領域についてみると、とりわけ、その行為によっておもわれた意味連関があまるところなくはっきりと知的に理解されるならば、それは合理的な明証性をもつことになる。行為において、その体験された感情連関が完全に追体験されるならば、それは感情移入による明証性をもつわけである。」（WuG pp.86-7）

私見によれば、ヴェーバーの理解社会学は、「プロテ

スタンティズムの倫理と資本主義の精神」を例にするともっともわかりやすい。というよりも、ヴェーバーはこの論文でおこなったことを学として成立させるために、「理解社会学」を構想したのではないかと思われる。

その意味でもこの論文は、社会学者ヴェーバーの誕生を告げる論文でもあったのである。

補 足

カルヴァンの生涯

1509：フランスのピカルディーで誕生（ルターの26年後）。ドゥメルグによれば、ピカルディー人は自由解放の精神に富んだ船乗りたちで、「勇敢にして短気なピカルディー人」という慣用語がある。カルヴァンは怒りっぽい性格だったと言われるが、自身の多くの書簡に「私は短気であることを告白します」という文章がある。

1523：聖職登録し、パリへ遊学。

1529：父の意志により法律の勉強に転向。

1531：父の死により、生来の希望である古典文学研究者（ユマニスト）になり、文学、古典文学の研究に没頭。

1532：『セネカ寛容論の注解』を刊行。世に知られるようになる。

1533：友人ニコラ・コップ、パリ大学総長就任演説に際して福音主義を説き、教会を追われ亡命。この演説草稿を書いた疑いによりカルヴァンも亡命。

1534：回心を体験、福音主義陣営に入る。故郷に戻り聖職禄を辞退。パリで「橄欖文事件」（教皇のミサの誤謬を攻撃したビラが、国王の寝室にまで貼られた）が起き、数十人が処刑される。カルヴァンはバーゼルに亡命。

1536：バーゼルで『キリスト教綱要』初版本（ラテン語、全6章）を刊行。

ついでフランス語版が刊行される。フェラーラからバーゼルへの帰途、戦乱のため道が通行止めになりジュネーブを経由。この地でファレルに引き留められ、ジュネーブの宗教改革のために働く。

1538：教会改革についてジュネーブの当局者たちと意見が合わず、追放され、ストラスブールへ。亡命者のためのフランス教会を建てる。

1540：3人の子を持つ未亡人イドレットと結婚。

1541：改革に失敗し、無政府状態となっていたジュネーブへ、再び招聘される。

1547：過労のため悪性気管支カタルを疾病。生涯過度の徹夜により体力を酷使。不断の偏頭痛のため口を開けられない状態が続く。

1553：三位一体を否定するセルベトスを告発。(市議会は火刑を宣告。

カルヴァンは火刑を免れさせようと努力するが火刑が執行される)

1556：肋膜炎、肺結核に襲われる。

1559：ジュネーブ大学を創立。

1564：7つか8つの病氣と戦いつつ死去。

6. 漢字の呪術的世界

漢字は殷の時代に占いのために発明された。甲骨文字は卜占のためにつくられたもので、天と王とのコミュニケーションの手段であった。

それが周の時代になって、行政のためのコミュニケーションの手段となりました。表意文字であるので、異なった言語体系の人々を束ねることができる。

白川静という学者は、漢字の持つ呪術的(まじないの世界)を解明している。この呪術的な世界についてすこし解説しよう。

呪術の世界では、超感性的諸力(ふだんは目に見えないさまざまな力)が満ちている。そこでは、アニミズム(物の背後にあってその物を動かしている靈魂(アニマ)を信仰すること)やプレアニミズム(見えない力(マナ)がさまざまな現象を引き起こしていると考えること)という呪術的思考が見られる。

ヴェーバーは呪術と宗教のちがいを、「神強制」と「神崇拜」という区別で説明している。

「神強制」とは、目に見えない力に働きかけて自分の都合の良いように現実を変えようとすることである。すなわち、これが呪術である。

例としては、「丑の刻参り」(うしのこくまいり)がある。これは、丑の刻(午前1時から午前3時ごろ)に、神社の御神木に憎い相手に見立てたワラ人形を毎夜五寸釘で打ち込むことで恨む相手を殺したり危害を与えようとする呪いである。

呪術では、直接、現実のものに力を行行使うのではなく、超感性諸力に働きかけて、その感性的諸力の力で現実を変えようとする。

例えば、雨乞いの祭りでは、天に犠牲を捧げて、雨を降らせようとする。犠牲は時には人間のこともある(人身御供)。

これにたいして、「神崇拜」とは、人間によって神が動かせることをあきらめ、ひたすらその加護を祈ることをいう。これが、宗教にあたる。

フレイザー(James Frazer 1854-1941)という人類学者は、その著『金枝篇』で、未開社会の神話・呪術・信仰に関する集大成した。そこではフレイザーは、「共感呪術」(sympathetic magic)という概念を提示し

た。

フレイザーによれば、未開人の思考を支配している呪術(まじない)の原理には次の2つがある。すなわち、

(1)類似の法則：類似は類似を生む、結果はその原因に似る

(2)接触(感染)の法則：かつてお互いに接触していたものは、空間を隔てて相互作用を継続する

類似の法則による呪術を、「類感呪術」(homoeopathic magic)あるいは、「模倣呪術」(imitative magic)という。

接触の法則による呪術は、「感染呪術」(contagious magic)という。

例えば、ある人物をのろい殺そうとする時、その人物に似せた像を突き刺したり燃やして呪いをかけるのは、類感呪術である。

それに対して、ある人物をのろい殺そうとする時、その人物がかつて接してた物(髪の毛など)を焼いたりして呪いをかけるのは、感染呪術である。

両方の呪術を組み合わせて、呪う相手の人間の爪や髪の毛を人形に入れて、人形を刺したり焼く、という合わせ技もよく用いられる。

ヴェーバーは、「類感的性的狂躁道」(die homoeopathische sexuelle Orgie)という言葉をししばしば使用する。これはフレイザーの類感呪術の原理にもとづく狂騒(どんちゃん騒ぎ)を指している。作物世界と人間世界の類似つまり作物の豊作と人間の多産のあいだの類似的関係から、豊作を祈願するために、人間の交合を祝う、多産をもたらすべく乱交する、というのがその内容である。

旧約聖書のなか(たとえば「出エジプト記」には、金の牡牛をあがめる宗教的な狂騒がしばしば出てくる。ヴェーバーの考えていた「類感的性的狂躁道」とは、この金の牡牛を崇める祭りをイメージしていると思われる。

フレイザーからヴェーバーへの影響はほかにもある。

フレイザーは、「呪術師としての王」として、王は天候調整(雨降らし)の呪術師である、ことがあるとしている。この雨乞い師としての王、という考えをヴェーバーは中国の周の王にあてはめて、中国の君主は「雨司」(Regemacher, rainmaker)であった、としている。

それでは、つぎにヴェーバーの『儒教と道教』の内容をみていくことにしよう。

文 献

- ・徳善義和(2012)『マルティン・ルター —ことばに生きた改革者』岩波書店
- ・Max Weber(1920a)『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』大塚久雄訳、岩波書店、1989

年

- Max Weber (1920b) 「社会学の基礎概念」 徳永恂
訳『社会学論集』青木書店, 2005年
- Max Weber (1921a) 『宗教社会学論集』大塚久雄・
生松敬三訳, みすず書房, 1972年
- Max Weber (1921b) 『儒教と道教』木全徳雄訳
(名著翻訳叢書), 創文社, 1971年